

[普及事項]

新技術名: モモ収穫後の銅水和剤の散布によって翌春の縮葉病の発芽前防除を削減できる
(平成24～26年)

研究機関名 鹿角地域振興局農林部果樹センター
担 当 者 浅利正義

[要約] モモせん孔細菌病を対象として収穫後の秋期に銅水和剤を10日程度の間隔で2回連続散布すると、翌春の縮葉病の発生を抑制し、本病を対象とした発芽前防除を削減できる。

[普及対象範囲]

県内のモモ園

[ねらい]

現在、モモの防除は収穫後にせん孔細菌病対策として銅水和剤を2回散布し、翌春の発芽前に縮葉病対策としてキャプタン水和剤などを散布している。一方、銅水和剤は縮葉病に対しても有効であり農薬登録を有することと、縮葉病菌は越冬期間中にほとんど増殖しないものと予想されることから、収穫後の秋期の銅水和剤散布は翌春の縮葉病に対しても防除効果を示すことが期待される。そこで、収穫後の銅水和剤の秋期散布が翌春の縮葉病の発生に及ぼす影響を明らかにし、縮葉病の発芽前防除を削減する。

[技術の内容・特徴]

1. モモ収穫後の銅水和剤の2回散布（10月下旬、11月上旬）は、翌春の縮葉病の発生を抑制する（図1）。
2. モモ収穫後の銅水和剤の2回散布は、9月下旬と10月上旬、10月上旬と10月中旬、10月中旬と10月下旬、10月下旬と11月上旬のいずれも、慣行のキャプタン水和剤による発芽前防除とほぼ同等の高い防除効果を示す（図2）。
3. 果樹センター内一般管理圃場における銅水和剤の収穫後の2回散布（平成25年10月22日、11月5日）、および鹿角市花輪の農家圃場における銅水和剤の収穫後の2回散布（平成25年9月23日、10月1日）は、いずれも翌春の発芽前防除を削減しても縮葉病の発生を認めず、高い実用性を示す。
4. 現在、収穫後の銅水和剤の2回散布はせん孔細菌病対策として必須であり、実施した場合は翌春の縮葉病を対象とした発芽前防除を削減できる。

[成果の活用上の留意点]

本県において、収穫後の銅水和剤の2回散布はせん孔細菌病の対策上必須である。本技術は収穫後の秋期にせん孔細菌病を対象として銅水和剤を2回散布した場合に、翌春の縮葉病に対して有効であることを示したものである。

[具体的なデータ等]

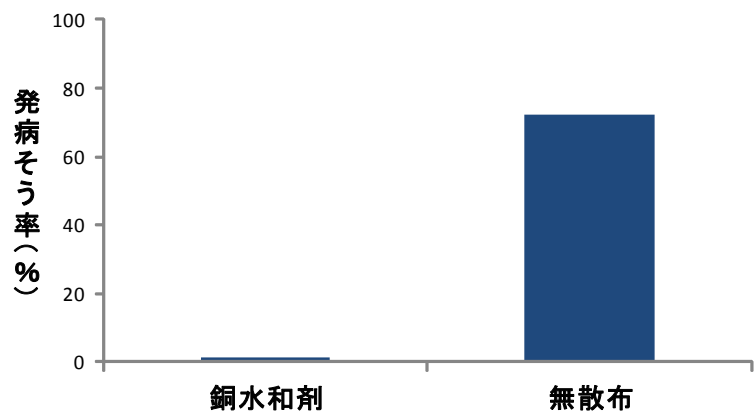


図1 モモ縮葉病に対する銅水和剤の秋期散布による防除効果

「川中島白桃」3年生樹を1区1樹5反復供試し、銅水和剤としてICボルドー412 30倍を平成24年10月25日、11月5日の2回散布した。平成25年6月5日に1樹当たり50葉そうの発病の有無を調査した。

表 1 銅水和剤の秋の散布時期と翌春のモモ縮葉病の発病そう率の関係

項 目	薬剤散布日						発病そう率 (%)
	平成25年					平成26年	平成26年 5月19日調査
	9月26日	10月7日	10月18日	10月28日	11月8日	4月15日	
収穫直後散布	1 回目	2 回目					0
収穫後散布		1 回目	2 回目				2
落葉期直前散布			1 回目	2 回目			0
落葉期散布				1 回目	2 回目		0
慣行防除						1 回	1
無散布							17

‘川中島白桃’7年生を供試し、銅水和剤としてICボルドー412を30倍で散布した。
慣行防除区はオーソサイド水和剤を600倍で散布した。

[発表論文等]

な し